私の友だちはむしが好き

とりがら016

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新米トレーナーマリィはジムチャレンジ開会式の日、「かわいい！なーなー、付き合ってくれへん？」という軽いノリをぶちかましてきたジョウト出身の少女ハクとともに旅をすることになった。

ハクはむしポケモンが大好きであり、たとえ火の中草の中水の中森の中。おじいちゃんからもらった言うことを聞かないハッサムを初めとして、様々なポケモンと出会っていく。

これは、マリィとその友だちハクによるほのぼの冒険記。

目　次

２１００円の犠牲の上に　1
ＶＳヤロー！　8
キャンプをしよう！　15
第二鉱山の喧嘩屋？　22
ＶＳビート！　29

２１００円の犠牲の上に

「あー！・また弾いた！」

　私の前で女の子が投げたボールを、ハッサムが叩き落とした。女の子が『また』と言ったように、ハッサムがこうしてボールを叩き落とした回数は既に１０を超えている。

　女の子の名前は、ハク。自分の投げたボールを叩き落としているハッサムのトレーナーで、髪はホワイトカラーのギブソンタック。スポーツキャップむし、トラックジャケットむし、トラックパンツむしを身につけているむしポケモン大好き少女。私としてはせっかくのかわいい顔がむし一色のコーディネートで台無しになっているからもったいないと思うのだが、本人は幸せそうなので口を出すことでもない。はず。

　ハクとはつい最近あったジムチャレンジ開会式で出会い、「かわいい！なーなー、付き合ってくれへん？」という軽いノリから始まり、なぜか付きまとわれて一緒にジムチャレンジを回ることになってしまった。「私ジョウト出身でなー。ハッサムもおじーちゃんからもろてん。カッコええやろ？」と言っていたので、ボールを弾いているのは人からもらったポケモンで、更にレベルが高いからだろうな、とまたボールが弾かれたところを見ながらぼーっと考える。

「マリィ！・ハッサムがまた弾いた！怒ったって！」

「いや、私ハッサムのトレーナーじゃないし……」

「うら……」

　私の足元にいるモルペコも「自分でなんとかしろ」と言っている。いつもかわいく笑っているモルペコですら呆れ顔だ。

「でも見てや！・２０００円！・２０００円弾かれたんやで!?あんなかぁいらしいイーブイもバチュルも逃がしてもうたし！」

「ハン」

「ハッサムは鼻で笑いよるし！・カッコいいけど！」

　ちくしょー！・と言いながら単身草むらに突っ込んでいくハクを見て、モルペコと一緒にため息。出会ってすぐボールを投げるならハッ

サムを出さなければいいのに、「せっかく一緒に旅するんやから、一緒におりたいやん？」と言ってボールに戻さないのだからどうしようもない。……一緒にいたいという気持ちはわからなくもないが。可愛かもんね。

「あんたも、も少し言うこと聞いてあげたら？」

「……」

草むらでがさがさとポケモンを探しているハクをじーっと見ているハッサムに近寄り、ハクの味方をしてみる。このままではジムチャレンジをハッサム一体だけで挑むことになるし、いくら強いハッサムだとはいえそれは厳しいだろう。言うこと聞かないし戦わないことだってあり得る。

「あ、もしかしてハクが他のポケモンに目移りしてるのが気に入らないとか？」

「ッ！」

「え」

こちらを向かないハッサムを下からのぞき込んで冗談を言ってみると、ハッサムは一瞬目を見開いた後そっぽを向き、とんでもない速さでハクのところに行ってまたボールを弾いた。「２１００円目やん！またバチュル逃げたし！もー！」という騒がしい声を聞きながら、ハッサムの行動にきゅん、と胸を締め付けられる。

「……ハッサム、可愛かね」

「うらら」

あんなカッコいい見た目をしていて嫉妬心バリバリはずるい。危うく私もむしポケモンが好きになるところだった。

「ボールなくなったー」とハッサムの腕にぶら下がるハクを見るハッサムの顔は、どこか満足気だった。

ターフタウン。４番道路の先にある１つ目のジムがあるところ。結局４番道路ではハクがボールを２１個無駄にし、私がモルペコを鍛

えただけで終わった。そのボールを21個無駄にしたハクは今ハッサムの背中に張り付いているので、実質私はハッサムの隣を歩いている。
「ほえー、緑！って感じ！綺麗やね！ね！」
「そうだね。むしポケモンいないかなーってうずうずしながら緑に飛び込もうとしてるハクがいなければもっと」
「ばれてもた」
　気まずそうにあはは、と笑うハクはすごくわかりやすい子だ。感情表現豊かというか、喜怒哀楽がはっきりしている。だからちょっと見れば何がしたいのかがすぐわかる。付き合いが浅くてもわかるのだから相当なわかりやすさだ。将来が心配になる。なまじ顔が可愛いものだから悪い男に騙されたり……。
　ハッサムがいるから安心だろうけど。
「ふふ」
「んー？どしたんマリィ」
「なにも。ね、ハッサム？」
「……」
　少し前なら怖かったであろうハッサムの鋭い眼光も、今じゃ可愛らしく思える。モルペコも「うらら！」とご機嫌な様子だ。はじめハクと出会った時にしたポケモンバトルでハッサムに一瞬で沈められてから警戒心丸出しだったが、さっきの出来事ですっかりなくなったらしい。
「うーん、まぁ笑ってるマリィ可愛いし、ハッサムはカッコええし、ええか！ポケモンセンターいこ、ポケモンセンター！ボール買いたいし！」
「そやね。おいで、モルペコ」
「うらら！」
　ハクに賛成し、モルペコを抱き上げてポケモンセンターに向かう。モルペコも疲れているだろうから、しっかり休ませてあげないといけない。今日はしっかり休んで、明日ジムチャレンジした方がいいだろう。

「へい！ジョーイさん！ちゃちゃっと休ませてください！……と思ったけど、ハッサム疲れてる？私の投げたボール叩き落とす作業しかしてへんけど」
「……」
「そか！」
　首を傾げながら聞くハクに、ハッサムは静かに首を横に振って答えた。こういうところを見ると言うことを聞かないというのが信じられないくらい仲が良さそうなのだが、ポケモンとは奥が深い。完全にいじっぱりで言うことを聞いていない感じがする。
　二人、一人と一体のやりとりを見てジョーイさんはくすくす笑い、そのまま、
「なら、帽子の中のアブリーはどうします？」
「……？」
「え」
　と言って、私たちを驚かせにきた。まさか、そんな気づかないうちにアブリーが帽子の中にいるなんてありえない。そう思いながらハクの方を見ると、つぶらな瞳をしたアブリーが帽子から顔を出していた。
「ブリッ！」
「わ！アブリーや！鳴き声がギリギリ！」
「なんで気づかんかったと!?」
「わからん！あはは！」
　どうやら頭にアブリーを乗せておきながらそれに気づかなかった自分がツボだったらしい。とても幸せそうに笑っている。ハッサムの背中から降りてアブリーとともにくるくる回る姿は可愛らしく、誰がどう見ても自分の間抜けを笑う少女の姿だとは思わないだろう。
「そや！せっかくついてきてくれたんやからゲットせんと！アブリー、一緒にくる？」
「ブリッ！」
「あは！ギリギリや！オッケー！」
「そのギリギリって言うのそろそろやめない？」

「あ、私女の子やった！」
　おっちゃーん、モンスターボールちょーだい！と元気にモンスターボールを買いに行くハクを見て、その間にモルペコを預ける。そこまで傷も疲れもないらしく、すぐに帰ってくるらしい。
「ハッサム、いいの？アブリーゲットしちゃいそうだけど」
　どう当ててほしい？こうか？こうか？とアブリーにいろんな角度からボールを向けているハクを静かに見守っているハッサムに話しかけてみる。さっきまであんなにボールを弾いていたのに、今はおとなしい。ハッサムは私を一瞥した後、ふっ、と息を吐いた。まるで「わかっていないな」とでも言いたげに。
「今邪魔したら本気で怒られそうだから？」
「……」
　ハッサムがはがねタイプの本領を発揮するかのごとくかちん、と固まった。悟られまいと硬直から抜け出して首を横に振るが、もう遅い。ジョーイさんだって「あらあら」と笑っている。
「あのアブリー、手持ちポケモンじゃなかったんですね」
「そうなんです。すみません、騒がしくしちゃって」
「いえいえ。そういえば知ってます？アブリーって花に似たオーラを持つ人の頭の上に集まるらしいんですよ」
「花に……」
　言われて、今しがたアブリーをゲットしたハクを見る。「出ておいで！」とアブリーを出して頭に乗せているハクの表情は確かに、花が咲いたように明るく綺麗で、可愛らしい笑顔だった。
「……」
「なんね？」
　ハクとアブリーを見て微笑んでいると、ハッサムが何か言いたげにこちらを見ていた。まるで自分のトレーナーを自慢するかのような眼差しに、「すごい人やね」と答えると、ハッサムは満足気。いちいち可愛い。保護者のようで子どもっぽく、それでいてカッコいい。そして可愛い。さらに強い。とんでもないポケモンを連れているな、とアブリーを連れてこちらにくるハクを見て戦慄した。

そんなハクはアブリーを頭に乗せたまま今にも飛び跳ねそうなテンションで外を指した。
「アブリー！育てる！」
「ん。もうちょっと待って。モルペコ預けてるから」
「なら技確認しとこ！えーっと……むしのていこう、あまいかおり、ドレインキッス……ムーンフォース！すごい！ムーンフォース使えるんや！」
「ブリィッ！」
「えっへんってしてる！可愛い！」
「ムーンフォース使えるのってすごいの？」
アブリーは確かむし・フェアリータイプだからムーンフォースを覚えても不思議じゃないと思うんだけど、と思いながら聞いてみるとハクは笑顔のままぐりん、とこちらを向いた。その迫力に一歩下がってしまうが、ハクは構わず話し始めた。
「あのな、おじーちゃんが言うにはアブリーは普通に育ててもムーンフォースは覚えんみたいで！なんか、ムーンフォースを覚えたポケモンとタマゴ産んだらその子がムーンフォースを覚えてる？みたいな！つまりこの子はすごい！」
「物知りなんだね」
「おじーちゃんも私もむしポケモン大好きやし！な！ハッサム！」
「ゼァ」
ハッサムは同意するように深く頷いた。元々はハクのおじいさんのポケモンだから、そのハッサムが頷いているのならハクの言うことは本当なのだろう。ハクがこんな感じだから、おじいさんはものすごくハッスルな感じなんだろうな、と勝手に想像する。
「はい！お待たせしました！モルペコ、元気になりましたよ！」
「うらら！」
「ありがとうございます」
ジョーイさんの言葉にカウンターへ近寄ると、ボールから出てきたモルペコが私に向かって飛びついてきた。慌ててキャッチしてジョーイさんにお礼を言って、アブリーを頭に乗せているハクと並

び、
「おまたせ。いこっか？」
「よし！いくよ、アブリー！ハッサム！」
「ブリー！」
「……」
　こうして、私と花に似たオーラを持つらしいハクはまた４番道路へ向かっていった。

ＶＳヤロー！

「よっし！アブリボン、頼んだで！」
「ブリィ！」
「いこうか、ヒメンカ！」
　ハクの頭の上に乗っていたアブリボンが意気揚々とフィールドに躍り出る。対するヤローさんはヒメンカを繰り出した。
　ここはターフタウンのジムスタジアム。今ハクがジムチャレンジャーとしてジムリーダーであるヤローさんに挑戦しているところだ。ちなみに私は先ほどヤローさんに勝利し、ジムバッジを手に入れている。そこから観戦許可をもらって、ハクのジムチャレンジを観戦しているというわけだ。
　色々心配だし、現にスタジアムへくるまでに結構時間がかかっていた。頭が悪いわけではないので、ただ単に遊んでいただけなのだろう。
「アブリボン、あまいかおり！」
「ぶーぶー」
　アブリボンはひらひらと舞いながらあまいかおりでヒメンカを誘う。あのアブリボンのあまいかおりは強烈で、一種のフェロモンのような、ともすればドラゴンタイプだって逃れられないあまいかおりだと思う。アブリーの頃はまだましだったんだけど、４番道路での特訓の末に進化したアブリボンのあまいかおりはとんでもない。
「ヒメンカ！こうそくスピンで振り払え！」
「メッ、メー……」
「ヒメンカ!?」
　証拠に、ヤローさんのヒメンカはふらふらしながらあまいかおりにつられている。ジムリーダーのポケモンなのだから生半可な鍛え方はしていないはずだが、それでもあぁなってしまうのだから恐ろしい。……ハクのオーラを吸ってるからあんなあまいかおりが出せるとか？
「よーし、そのままムーンフォース！」

「ブー、リィ！」
　ムーンフォースは幻想的な攻撃だ。まるで月かと思わせる見た目のフェアリータイプらしいピンク色のエネルギーをためたアブリボンは、それをあまいかおりでふらふらしているヒメンカに向かって放つ。ムーンフォースはその名の通り月の力を借りるらしく、その威力は絶大。
「ヒメッ!?」
「ヒメンカ！」
　ヤローさんの指示を聞ける状態ではなかったヒメンカは、ムーンフォースをまともにくらってしまった。あまいかおりにつられてやってきたらとてつもないエネルギーをぶつけられたのだから、ヒメンカもたまったものではないだろう。何度かハクのアブリボンとバトルしたが、それがトラウマになってモルペコがあまいかおりに対して耐性を持ってしまったのはいいことなのか悪いことなのか。
「あちゃー、強いな！ハクさんのアブリボン！」
「ありがとうございます！」
「ぶりぃ！」
　ノックダウンしたヒメンカをボールに戻しながらアブリボンを褒めるヤローさん。実際あのアブリボンは強いと思う。もしかしたらハッサムもアブリボンの強さを見抜いて認め、ゲットすることを許したのかもしれないし。そう思っておいてあげた方がハッサムのためでもあるだろう。
「ちゃんと鍛えてきとるな！こりゃぼくもダイマックス使わねば！いけ！ワタシラガ！」
「ワタッ！」
　ヤローさんが次に出したのはヒメンカの進化系。頭に大きな白い綿を持つくさタイプのポケモン。
「ポケモンの交代は？」
「うーん、どうせハッサム言うこと聞かんし、そのままで！」
「……」
　遠目でよくわからないが、ハッサムが悲しそうな目をしている気が

した。普段の行いが悪い。
「よし、ワタシラガ！ダイマックスだ！」
ダイマックス。それはポケモンが巨大化するという特殊な現象で、ガラル地方でのみ確認されている。モンスターボールにエネルギーが集まり、モンスターボールが巨大化するとヤローさんはそれを自分の背後に投げつけた。
「フワァァァァ！」
そして現れたのは、巨大なワタシラガ。大きくなっても可愛いが、見た目で油断してはいけない。ダイマックスすると時間制限はあるが体力が増し、更に技も強力になる。
となると自然。
「んー、ほなアブリボンもダイマックスしよか？」
「ぶ、りぃ!?」
「おわ、ハッサム？」
「……」
アブリボンもダイマックスするだろう、と思いきやハッサムが割り込んできた。意気揚々とダイマックスしようとしていたアブリボンは不満気にハッサムの周りを飛び回っているが、ハッサムはハクの顔をじーっと見つめるのみ。
「えーっと、うん？よーわからんけど、ダイマックスしたいん？」
「……」
ハクの問いかけにハッサムは小さく頷き、アブリボンをハサミでどけて前に立つ。……初めてのダイマックスだから自分がやりたい、とか？
「かわいかぁ……」
「うららぁ……」
よーし、いくよー！という元気な掛け声とともにダイマックスしたハッサムを見て、カッコいいとか強そうとかよりもかわいいという感想が先に出てしまう。どこまで私とモルペコをきゅんきゅんさせれば気がすむのだろうか。あと待ってくれてるヤローさんがいい人過ぎる。

「結局交代ってことでいいんかな？」
「はい！ハッサムがやる気みたいです！」
「いいことだ！それじゃ仕切り直しにワタシラガ！ダイアタッ、」
「ゼァア！」
　一瞬。ヤローさんのワタシラガが行動に移る前に、ハッサムは目にも止まらぬ速さでワタシラガに肉薄し、一瞬で沈めた。まさに一瞬の出来事。それだけでワタシラガのダイマックスは切れ、戦闘不能になってしまった。
「わー！何したん!?すごっ！カッコよ！」
「……」
　満足気な表情で小さくなっていくハッサムを見ながら、そういえばあのハッサムめちゃくちゃ強かったということを思い出し、モルペコは初めて会った時に叩きのめされたことを思い出して身震いしていた。

「もらった！」
「よかったね」
　ヤローさんにもらったバッジを嬉しそうに見せてわいわいはしゃぐハクに苦笑い。結局あの後、変な感じで終わってしまったバトルにヤローさんも戸惑っていたが、負けは負けだとハクはバッジを貰っていた。好き勝手かき回したハッサムは「どうだ」と言わんばかりにふんぞり返っていたので、「あんな勝手、だめばい。ね？」と言うと気まずそうに目を逸らされた。自覚はあったようだ。
　なぜ私がハッサムに怒らないとだめなのだろうか。
「あんたのせい」
「ふへ？」
　しっかりしろ、という意味もこめて頬をつついてやると、間抜けな声を出して間抜けな表情をしながらこちらを見てきた。そのまま頬

をぷくーっとさせて私の指を動かして遊び始めたハクに、思わず笑ってしまう。
「ふふ。変な顔」
「なんやて！可愛いやろ！マリィには負けるけど」
「うん。私には負ける」
「負けてへんわ！」
「どっちと？」
多分、「そんなことないよ」と言われると思っていたのだろう。私はハクの方が可愛いと思っているが、調子に乗らせるのも癪だ。ハッサムを怒ったのだからこれくらいはいいだろう。
「ふん。私には可愛いアブリボンとカッコいいハッサムおるからええもん。なー？」
「ぶー？」
「……」
「私にはモルペコがいるし」
「うらら！」
確かにアブリボンは可愛いしハッサムはカッコいいが、モルペコには負ける。これは譲れない。トレーナー１００人に聞いてそのうち８０人がモルペコの方が可愛いと答える自信がある。むしポケ好きに聞かなければそういう結果になるだろう。
「確かに！モルペコ可愛がってるマリィ可愛いし、可愛がられてるモルペコ可愛いし、永久機関？ってやつ？ん？わからん！５番道路いこ！」
「……」
ハクが男の子だったら危なかったかもしれない。あぁいう天然で人を褒めることができて、どこか放っておけないタイプは女をたぶらかすに決まっている。私はそうじゃないけど？
「うら」
「違うけんね」
何か言いたげなモルペコを抱えて、走っていったハクの後を追う。
５番道路を抜けるとバウタウンにつく。バウタウンにもジムがあ

り、みずタイプのジムリーダーであるルリナさんがいる。モルペコは相性的に有利だけど、やっぱり油断せずに育ててておきたい。
　なんだかんだハクとのバトルは負け越してるし、いつかぎゃふんと言わせてやる。
「むしポケむしポケ……」
「また探してる」
　ハクに追いつくと、目を輝かせながらむしポケモンを探していた。本当に好きなんだなと呆れを通り越して尊敬すらする。どうせ捕まえようとしてもハッサムに邪魔されるんだろうけど。
「あ、チラーミィ！可愛い！」
「ほんとだ」
　今しがたハクの声にびっくりして逃げて行ってしまったが。
「そういえばむしポケモン以外は捕まえんと？４番道路でイーブイ捕まえようとしとったけど」
「んー、できればむしタイプだけがええけど……タイプというか、むしっぽいというか？」
「イーブイは違うけど」
「イーブイはほら！むしタイプに進化するかもせんし！」
　かわいいと思うねんなぁ。とむしタイプのイーブイを想像するハクは本当に幸せそうで、涎まで垂らしていた。はしたないのでハンカチで涎を拭き取ると、もごもごしながら「ありぁと」と言ってくる。いちいち母性をくすぐってくる子だ。
「そんでな、決めてん。いくらボール投げてもハッサムが弾くから、ついてきてくれる子をゲットしよって！」
「アブリーだけになるんやなか？」
「そんなことにはならへん……はず……」
　尻すぼみに声が小さくなっていくハクに、頭の上に乗っているアブリボンは首を傾げていた。本当にアブリーがたくさん寄ってきそうだから困る。
「うーん、おらんかなぁ。ちょこちょこーっとついてきてくれる可愛らしいむしポケモン」

「どうかな。ハッサム怖いし」
「……」
「ハッサムはカッコいいし、ちょっと可愛いとこあるんやで？」
「ゼァ」
　満足気に頷くハッサムがむかついたので、ハクが見ていないときに蹴ってやった。そうやって甘やかすからいつまでたっても言うこと聞かないしボールを弾くのに。
　私の憤りをよそに、ハクはうきうきしながらむしポケモンを探し続けた。このままだと5番道路でキャンプなんてことになりかねないので早く見つけてほしいものである。どうせ捕まえられないけど。

キャンプをしよう！

「キャンプを！します！」
「ブリィ！」
　嬉しそうなハクとアブリボンをよそに、私とモルペコ、そしてハッサムまでもがため息を吐いた。
　ここは5番道路。ハクがむしポケモンを探し続け、結果一匹もついてきてくれることなく時間だけが経っていき、綺麗な夕日が辺りを照らす夕方になってしまっていた。私とモルペコは野生のポケモンと、時にはトレーナーとバトルして時間を潰していたが、ハクはポケモンを探すのみ。バトルを挑まれても「アブリボン、ハッサム！適当にやっといて！」と丸投げする始末。それで勝ってしまうのだから挑んできたトレーナーもやりきれない。
「ターフタウンに戻らんと？」
「キャンプしたくてなぁ。それに慣れとかなあかんし、あんまり危険じゃないときにやっといた方がええやろ？」
　言いながら少し大きめのテントを引っ張り出し、慣れた手つきで設営していく。ハッサムもそんな大きなハサミをどう使っているのかと不思議になるくらい器用に設営を手伝っており、恐らく子どものころにキャンプ慣れしていたんだろうな、と思いながら設営を手伝う。開会式に行く前一応キャンプについては教わったので、なんとか役に立てるはずだ。
「ハッサム！ペグ打ち！」
「……」
　ハッサムが自慢のハサミでペグを打ち込み、テントの固定が完了。何か文句を言うかと思ったが、ずっとペグ打ち役をしていたのだろう。あんなすごいバトルをするハッサムをペグ打ちに使うのはどうかと思うが、平和的でいいんじゃないかな、と思うことにした。
　そんなこんなで完成したテントは4～5人なら楽に入れそうなテント。どうせポケモンと一緒に寝たいからこのサイズなんだろうな、と決めつけて何も聞かないでいると、「ポケモンと一緒に寝たくて

なぁ」と言ってきた。聞いとらん。
「ハッサムは辛口でー、アブリボンは何が好き？甘い辛い苦い渋いすっぱい」
「なにそれ？」
　早速料理や！とハクが取り出したのはピンク色と赤色と黒色と緑色と黄色の５つのボトル瓶。私の疑問にハクはピンク色のビンを私の前に持ってきて、栓を抜いた。
「わ、あまい」
「やろ？これはポケモンの好みの味がわかる不思議な粉！せっかくやから好きなもん食べさせたいやん？」
「ブリィ！ブリィ！」
「アブリボンは甘口が好きなん？オッケー！」
　ちら、と瓶の中身を見ると中にはピンク色の粉が入っていた。なんでも、きのみ等を潰して粉末状にしたもの、らしい。普通の味のカレーを作った後にポケモンの好みの味つけになるよう粉を混ぜるのだとか。
「せやから、ちょーっと水っぽいカレー作んねん。ほんまにちょっとな！」
「モルペコは甘いのが好きなんだっけ？」
「うらら！」
「せやったらハッサムに我慢してもらうのもええかもせんなぁ」
「……！」
　気にしてないぜ、という風にそっぽを向いているが、よく見てみると目を見開いてショックを受けている。「冗談やでー」と言われてほっとしたようだが、いじっぱりならいじっぱりを貫き通してほしい。
「マリィは火加減頼むでー。ぱたぱたーって」
「強すぎたら言ってよ？」
「……その恰好でしゃがむと視覚的刺激が」
　バカなことを言うハクにモルペコをけしかけ、制裁。モルペコとはしゃぎ回るハクに代わってカレーをかき混ぜるハッサムは流石とし

か言いようがない。
「もー、冗談やん？いや冗談でもないんやけど」
「モルペコ」
「わーまってまって！」
　モルペコを抱きかかえながら戻ってきたハクになぜか苛ついたのででんきショックを与えようとしたが、必死に謝ってくるので許してやることにした。まったく、ハクはむしポケモンだけ可愛がればいいんだ。
「ハッサムありがとうなー。お礼に愛情たっぷり込めたるわ！」
「ゲェ」
「ハッサムが出したらあかん声出してまで嫌がるなや」
　あとでキスしたろ、とハクがハッサムに更なる嫌がらせを心に決めたところでカレーが完成。何も特別なことはしていないので普通にカレーって感じだ。
「よーし、盛るで！」
「なにそのお皿」
　ハクが取り出したのは黄緑色で色々なむしポケモンが描かれているお皿。人によっては食欲を失いそうなお皿だ。
「かわええやろ？」
「う、うーん」
　テーブルクロスもむしポケモンが描かれているものだったから驚きはしないけど、いくらなんでも好きすぎじゃないかと思う。むしポケモンが好きすぎて結婚できなさそう。
　いや、むしポケモンと結婚しそう。それこそハッサムとか。
「じゃあ食べよか！」
「ハッサムがスプーン持ってる……」
　ハッサムが礼儀正しく背筋伸ばして座って、ハサミでスプーンを持っている。育ちがよさそう。よく見るとハクも髪綺麗だし、可愛いし、どこかのお嬢様だと言われても納得できる。もしかしていいとこの子で、ハッサムは付き人、付きポケモンみたいな感じ？
「ゲロ礼儀正しいやろ？カッコいいやろ!?」

そんなわけないか。お嬢様はゲロなんて言わない。しかも食事前に。
「ほな冷める前に！いただきまーす！」
「ます」
人の食欲をそいでおきながら、ハクはおいしそうにカレーを食べ始めた。時々アブリボンの方を気にしているのは先ほど密かに作っていたアブリボン専用スプーンの出来を気にしているからだろうか。ハッサムと同じく変なところ器用だ。
「アブリボン、おいしい？」
「ぶりっ！」
「そかそか！モルペコは？」
「うら！」
「うん！マリィは？」
「ポケモンに聞くのと一緒のテンションなんが疑問やけど……おいしいよ」
あとハッサムにも聞いてあげてほしい。聞いてほしそうにうずうずしてるから。
そんなハッサムの願いもむなしく、ハクはまたカレーを食べ始めた。いや、ほら。聞かなくてもわかる信頼というか、そういう風に捉えればいいんじゃない？かな？
「そういえば、なんで私と一緒にジムチャレンジしようなんて言ってきたの？」
ハッサムがかわいそうなので、一刻も早く忘れられるようハクに話を振る。このまま沈黙してしまうとハッサムがみじめになるだけだ。
私の言葉にハクは小さく首を傾げて「んー」と悩むと、「かわいかったのもそやけど」と切り出した。
「実はマリィ誘う前に誘った子おるんやけど、断られてもうてなぁ」
「……へー」
「や、怒らんとってや！名前がむしに似てたってだけやし、本気で誘ったわけちゃうから。『男と女で旅なんてありえません！』なんておカタいこと言われたし」

私もありえないと思う。今こうしてキャンプをしている状況からみてもそうだ。ハクは男女の違いを気にしていなさそうだが、きっとハクに誘われた子はバリバリ意識するタイプだったんだろう。マセガキ。
「で、ポケモンバトル誘われて妙にやる気やったハッサムがボコボコにして、どうしよかなってー他の人探してたらマリィ見つけて、ビビッ！ときてん」
「そもそも、なんで他の人とジムチャレンジしようなんて思うたと？」
「えー、だって一人って寂しない？おかーさんも『女の子の一人旅はダメよ！』ってわけのわからんこと言うし。心配ないのになー。なぁ？ハッサム」
「……」
こいつマジか、という目でハッサムに見られたハクは「そやんなぁ」と頷いていた。意思の疎通ができていない。
女の子の一人旅がダメだ、というよりハクの一人旅がダメな気がする。あっちへふらふらこっちへふらふら。挙句の果てには悪い大人に騙されて一文無しになるなんてことになりかねない。ハクのお母さんはハクのことが心配で仕方ないのだろう。
「だってハッサムおるし」
「ゼァ」
ハッサムがこの調子だし。ハッサムがもっとしっかりしてくれればハクのお母さんも安心だっただろうに。いじっぱりでチョロいから心配されるんだ。こうなれば私がしっかりしなければ。
「ごちそーさま！片づけて遊んで寝よ！」
……キャンプの手際に関してはハクの方がしっかりしているからそっちの方は任せるとして、他の方面でしっかりしよう。
しかし、ハッサムに手際で負けた時は流石に堪えた。いや、慣れがあるんだろうけど……だろうけど！

「やっぱりマリィ髪ほどいたら美人やねぇ」
「……」
「照れとる」
「照れとらん」
　片付けをした後、はしゃぎ回った私たちはテントの中にいた。いつも可愛い可愛いと言ってくれるのでそれには慣れているが、髪をほどいた時に言ってくる美人にはまだ慣れない。第一なぜこうもストレートに褒めてくるのだろうか。いつも一緒に寝るとき嬉しそうに抱き着いてくるのも照れ臭いし。私を恨めしそうに見てくるハッサムは何か怖いし。きっと私と寝る前はハッサムが抱き着かれていたのだろう。
　そんなハッサムは今見張りよろしくテントの入り口前で座っている。こういうときはものすごく頼もしいのに。
「なんで女の子って無条件でええ匂いするんやろなぁ？」
「ハクも女の子でしょ」
「自分の匂いってわからんし」
　言いながら匂いを嗅いでくるハクが気持ち悪かったので押しのけると、「いやん」と気色の悪い声。どうしてくれようか。
「もー、ケチ。ちょっとくらいええやんか」
「ダメ」
「え、かわい……私オスになるかも」
「ハッサム」
「あ！なんで私とマリィの間に入ってくるん！っていうかなんでマリィの言うこと聞くん!?」
　これ以上セクハラされてはたまったものではないのでハッサムを間に置いてガード。ハッサムは自分が得する命令なら聞くはずだと思ったがその通りだったようだ。「でかした」っていう目してるし。
「むー。まぁえっか。今日は久しぶりにハッサムと寝よー」
「……」
　娘との久しぶりの交流を噛みしめるお父さんみたいな顔をしてい

る。悪いことしてたんだなぁ、私。
「ほな、おやすみ。マリィ」
「……ん、おやすみ」
ただ、ハクが離れるとどことなく寂しくなってしまっている私はとてつもない猛毒に侵されているに違いない。ハクのセクハラを忘れようと既に眠ってしまっているモルペコを抱きつつ、私は眠りについた。

第二鉱山の喧嘩屋？

「ゲット！」
「おめでと」
　キャンプをした次の日。私たちはバウタウンに到着し、一日休んでから流れるようにジムチャレンジ。見事二人ともジムリーダーを倒してバッジを手に入れた。ほとんどポケモンの強さによるごり押しだったので、次のジムチャレンジから厳しくする、らしい。私はでんき技連打でハクはアブリボンのムーンフォース連打だったから仕方ない。
　とはいえ、これでバッジは二つ目。次のジムチャレンジから厳しくなるらしいし、そろそろモルペコだけでは厳しくなってきた頃だろう。次のジムはほのおタイプだからハクもタイプ相性的に厳しいし、今から向かう第二鉱山で対策できるポケモンをゲットできればいいのだが……。
「わ、綺麗！」
　第二鉱山に入ると、そこは薄暗くどこか冷たさも感じる空気だったが、輝く鉱石が様々な色の光を放ち辺りを照らしていた。幻想的、と言えばいいのだろうか。ただ、ハッサムの体に光が反射して少し眩しい。
「今度こそむしポケモンゲットしよ！」
「むしポケモンばっかだとカブさんに焼かれるけど」
「そやねんなぁ。せやからみずタイプとの複合がええんやけど……」
　そのみずタイプとの複合であるシズクモが5番道路にいたのだが、『ついてきたいポケモンだけゲットする』というスタンスに変えてしまったためゲットできていない。ハッサムの隙を見てゲットすればいいのに。そうしてしまうとハッサムが拗ねて余計言うことを聞いてくれなくなってしまう気もするけど。
　第二鉱山を歩きながらポケモンを探す。私もできれば二体ほどゲットしておきたい。……できればあくタイプ。それかあくタイプに強いフェアリータイプ対策にどくタイプかはがねタイプ。

「お、マッギョ」
「え?どこ?」
「ほら」
　ハクが急に立ち止まって、すぐ目の前の地面を指す。ぱっと見ではよくわからないが、よく見ると何か口のようなものが地面からひょっこり出ていた。
「あーやってエモノおびき寄せてガブーっていくらしいで。マリィもモルペコも気いつけや」
「物知りやね」
「おかーさんが足ちぎれたらあかんからって教えてくれた」
　そんな足をちぎってくるようなポケモンを放置しておくわけがないと思うけど、痛そうなことには変わりないからここはハクのお母さんに感謝しておこう。マッギョを踏んではいけないのでモルペコを抱き上げて、ハクの後ろを歩く。これなら少なくとも私がマッギョにやられることはない。
「私を盾にしてへん?」
「まさか」
「まぁ、マリィを守れるんやったらええか!」
　そう言って私の前を歩くハクの前にはハッサムがいる。つまり、マッギョにやられるのはハッサムということだ。実質私を守ってくれているのはハッサムということになる。まぁハクがいなければハッサムはここにいないのだが。
「オンバット、カラナクシ、カメテテ……うーん、むしタイプおらへんなぁ」
「出ないとか」
「この世にむしポケモンが出えへんとこなんかある?」
「ないとは言い切れんけど……」
　何もそんな狂気に満ち溢れた目で言わなくても。むしポケモンが好きなのはわかったから、もう少しそれを抑えてほしい。私までむしポケモンが好きになってしまいそうだ。
　輝く鉱石よりも目をぎらつかせているハクと第二鉱山を進んでい

く。いつもならトレーナーが勝負をしかけてきているのだが、第二鉱山には他にトレーナーがいないのかと思う程勝負をしかけてこない。変だな、と思いつつ歩いていると、
「お、マリィ、見て」
「……喧嘩？」
　ちょうどまっすぐ行ったところでポケモンが喧嘩していた。ズルッグと、グレッグルと……。
「コソクムシ？」
「な！珍しいよな！」
　ズルッグとグレッグルが喧嘩するのはまぁわかる。でもコソクムシが喧嘩するのは意外というか、逃げ回るイメージしかないから不思議でならない。
「コソクムシが逃げずに戦ってる！あ、やば、興奮してきた。なぁハッサム。何が何でもあの子ゲットしたいんやけど、あかん？」
「……」
「なんで妙に色っぽくなっとーと？」
「うらら……」
　頬を紅潮させて熱い吐息を漏らしながらハッサムにおねだりするハクに、モルペコも「ダメだこいつ」と呆れかえっている。というか引いている。むしポケモンが好きで、しかも珍しい行動をするむしポケモンだからゲットしたいというのはわからなくもないが、興奮しすぎだ。ハッサムも主人の興奮を収めようとしたのか、ハサミで軽く小突いている。
「あいたっ！何も殴らんでええやんかぁ」
「ゼァ」
「しゃあないやんか。それにあの子強そう思わへん？」
「……」
「お、それオッケーってことやんな？よし！」
　意思疎通がまったくできていない場面があるかと思えば、今は完璧に意思疎通ができている。ちぐはぐすぎると思ったが、意見が一致しているときは意思疎通ができるのだろうか。ハッサムもあのコソク

ムシを認めているみたいだし。
「そろーっと、そろーっと」
まだ喧嘩している三体のところにハクが忍び足で近づいていく。私もあくタイプのズルッグとどくタイプのグレッグルが欲しいのでまねして近づいていく。漁夫の利的な感じで捕まえてしまおう。
「コソッ」
しかし、忍び足も空しくコソクムシに気づかれてしまった。コソクムシが私たちに気づくとズルッグとグレッグルもこちらを向き、私たちを睨みつけてくる。
「これ、矛先こっちに向いた感じ？」
「ぽいね」
私はモルペコをおろして、ハクは頭の上で寝ていたアブリボンを起こし、バトルの準備。トレーナーがいなかったのはこの子たちにやられてしまったからかもしれないので、最大限警戒しておく必要がある。
「ズルッ！」
「お、こわいかおやな！」
こわいかお。確かポケモンの行動が遅くなってしまう技だったはず。ハッサムには効果がないようだが、モルペコとアブリボンは少し怯んでしまった。
そして、その隙にものすごい勢いで水を纏ったコソクムシが突進し、モルペコを弾き飛ばす。
「モルペコ！」
「アクアジェットやん！ほえー！あの子絶対強い！」
「言っとー場合か！大丈夫!?モルペコ！」
「うらら……」
思ったよりもダメージがないみたいで、すぐに立ち上がる。それにしてもこわいかおからのアクアジェットとは、何か連携し慣れているような……。
「ぐ」
「う、らぁ！」

「ブリィ！」
「今度はいばるか！へぇ！」
かと思えば、グレッグルがむかつく顔で見下してきた。ハクの言う通りいばるだろう。相手のこうげきを上げる代わりにこんらんさせる技。やはり連携し慣れている……？
「さて、観察は終わり！アブリボン、アロマセラピー！」
「ぶ、リィ！」
いばるを受けてこんらんしていたはずだが、アブリボンはハクの指示を受けてアロマセラピーを使う。アロマセラピーは受けたポケモンの状態異常を治す技。これでモルペコもこんらんが治ったわけで、
「モルペコ！グレッグルにスパーク！」
「アブリボン！コソクムシとズルッグにかふんだんご！」
「うららぁ！」
「ブリッ、ブリッ！」
またいばるをされたらアロマセラピーが成功するかわからないのでグレッグルから狙う。それをサポートするようにアブリボンのかふんだんごがズルッグとコソクムシに向かって放たれた。アブリボンに進化してすぐ覚えた技であるかふんだんごは威力が高く、そのままズルッグとコソクムシを吹き飛ばす。
「ぐ」
「左に避けて！」
援護が期待できないと判断したグレッグルは右手を突き出してきた。恐らくどくづき。それを寸でのところでかわし、グレッグルにスパーク！
「ナーイス！ええやんモルペコ！」
「なんで私より先に褒めると!?」
「ええやん。ほら、ゲットチャン、ス？」
なぜか言葉の途中で首を傾げたハクに、私も首を傾げる。見ると、ズルッグとグレッグルが膝をついて頭を下げており、コソクムシはハクの足に擦りついていた。えっと、これは、
「どういうことやろ……」

「んー、もしかして強いトレーナーを探してた、とか？」
私の言葉にズルッグとグレッグルは強く頷いた。そんなことがあるのか、と驚きつつふとハクの足に擦りついているコソクムシに違和感を覚える。ズルッグとグレッグルは強いやつについていく、みたいな意思を感じるけど、コソクムシはそうでもないような……。
「コソクムシは、あんたたちと同じ？」
「ズル」
「ぐ」
聞くと、ズルッグとグレッグルは首を横に振る。ということは、
「コソクムシは関係なしに喧嘩売っとったんか！カッコいいなぁ！」
「コソッ！」
ずいぶん珍しいコソクムシがいたものだ。あのにげあしが速いことで有名なコソクムシがまさか自分から戦いに行くなんて。アブリーがハクの帽子の中にいたのは習性もあるからそこまでおかしなことではないが、流石にこれはおかしい。どうせこのコソクムシもハッサムやアブリボンと同じく強いのだろう。
「ま、いいか。一緒にくる？」
「ズルッ！」
「ぐ！」
どうでもいいけど、ズルッグとグレッグルの鳴き声を合わせると『ズルッグ』になって、まるでズルッグだけ鳴いているみたいになる。あまりのくだらなさに自分で笑いながら、二体をゲットした。
「でておいで！コソクムシ！」
ハクは既にコソクムシをゲットしたらしく、ゲットしたそばからコソクムシを出して撫でまわし、可愛がっていた。……普通に見るとコソクムシは可愛らしいとは言い難い見た目をしているが、こうしてみると可愛いと思えてしまう。
「ん？どしたんマリイ。コソクムシ触ってみる？」
「……！モルペコ、おいで」
「うらら！」
むしポケモンに危うく魅了されそうになったところをモルペコに

よって回避する。危なかった。私がむしポケモンにハマってしまったらハクが意気揚々と「むしコーデせえへん？」とあのクソダサコーデをさせられてしまうことだろう。それだけは避けなければならない。

「よーし、新しい仲間ゲットしたし、行こか！」

……やっぱりあとで触らせてもらおうかな？

ＶＳビート！

「久しぶりですね」
「お？」
　第二鉱山を歩き続けてようやく抜けられる、と気を抜いていた時に高圧的な感じの声に呼び止められた。振り返ってみると、くるくるした白い髪の生意気な目つきをした男の子がいた。男の子の視線はハクに向けられているため、どうやらハクの知り合いのようだ。
「ビートや！ほら、マリィの前に誘った子おる言うたやん？」
「あぁ、あのハッサムにコテンパンにされたっていう」
「明らかにレベル差があるであろうハッサムを、あと一歩のところまで追いつめたビートです」
　ほんとかな、とハッサムを見てみると思いきりビートを睨みつけていた。どうやら嘘らしい。このハッサムは信じられないほど強いからどうせ嘘だと思ってたけど。
　ハッサムに睨まれたビートはまったく堪えた様子もなく、むしろハッサムを睨み返した後不敵に笑い、ハクを指で指し、その高圧的な声を第二鉱山に響かせた。
「あの時の屈辱、ここで返させてもらいますよ！ぼくとポケモンバトルです！」
「ハッサム」
「ハッサムはなしで！」
「ダサ」
　ダサいが、賢いとも言える。ジムチャレンジ途中のトレーナーが勝てるポケモンではないのだ。その実力差を理解して挑まないというのは賢い。プライドで挑んでも負けては意味がない。執着心が強いタイプでプライド人間かと思っていたが、案外そうでもないようだ。
　ハッサムはなしと言われて素直にハッサムを後ろに下げたハクは、少し悩んだ後足下のコソクムシに目を向けた。
「えっと、私ハッサム抜くとポケモン二体しかおらんのやけど、何対何？」

「もちろんフルバトル、といきたいところですが、あなたのレベルに合わせてぼくも二体でいきましょう」
「わ、合わせてくれるんや！ええ人やなぁ」
「純粋がすぎる……」
　最初にハッサムを抜きにしてあげたのはハクなのに、『合わせてくれる』ってどこまで純粋なんだろう。むしポケモンと触れ合っていればそうなるのだろうか。それなら全世界をむしポケモンであふれさせれば犯罪はなくなるということになるが、全員ハクみたいになったら経済も何もかも回らなくなりそうなので没。
　ええ人やなぁ、と言われたビートは「そうでしょう？」と髪をかき上げて調子に乗り、ボールを手に取る。案外ハクと相性がいいのかもしれない。高圧的な人に対して『いい人』って言える人は中々いないし。
「さ、始めましょう。行きますよ、ゴチム！」
「ちむっ！」
「わ、可愛い！ならこっちはコソクムシ！」
「コソッ」
　ビートが繰り出したのはエスパータイプのゴチム。ハクの使うむしタイプとは相性が悪いタイプだ。ちなみに私の使うあくタイプはエスパー技がまったく効かない。私たち二人はビートを倒すために生まれてきたのだろうか？
「コソクムシ、アクアジェット！」
「ゴチム、がんせきふうじ！」
　コソクムシとゴチムの二体がトレーナーの指示通りに動き出す。コソクムシはその小さな体に水を纏い、普段のちょこちょこした動きからは想像できないような速度でゴチムに向かって突進した。対するゴチムはエスパータイプらしくねんりきで岩を持ち上げ、コソクムシの周りに岩を飛ばす。
「ぼくがむしタイプ対策もせず勝負を挑むと思いましたか!?」
「岩ごとぶっ飛ばせ！」
「は？」

「コソォッ!!」
　得意気に語るビートを無視して、ハクがとんでもない指示を飛ばす。むしタイプはいわタイプが効果抜群であり、向かってくる岩を弾き飛ばして攻撃なんて無茶にもほどがある。ただ、コソクムシはやる気に満ち溢れており、逃げ回るのが普通なポケモンとは思えないほど勇敢な目で突進し、岩を弾き飛ばした。
「ゴチム!・サイケこうせん!」
　予想外の行動に一瞬驚いたビートはすぐに気を取り直して新たに指示を飛ばした。苦手なタイプを打ち破って、しかもコソクムシが。そんな状況ですぐ立て直せるのは素直にすごいと思う。元々の実力が高いのだろう。
「ジャンプしてむしのていこう!」
　しかしハクのコソクムシはサイケこうせんすら避けて、上からむしのていこうを放つ。むしタイプの技だからゴチムには効果抜群で、しかもむしのていこうはとくこうを下げる効果があったはずだ。特殊攻撃が主体のゴチムにはとくこうが下がるのは厳しいだろう。
　そんな私の考えとは裏腹に、ビートはにやりと笑った。
「コソクムシがむしのていこうを使うのは知っています!計算通りだ!・ゴチム、サイコショック!」
　むしのていこうを受けてひるんでいたゴチムがコソクムシを睨みつけると、コソクムシの周りに薄紫色のオーラのようなものが浮かび上がった。
「チムゥ!」
　そしてそのオーラはゴチムの声とともにコソクムシへ襲い掛かる。コソクムシは今空中にいるから避けようがない。
「コソクムシ、まるくなる!」
「コソッ」
　襲い掛かる攻撃にまったく慌てた様子もなくハクは冷静に指示を出し、コソクムシは縮こまって丸くなった。丸くなることで自分のぼうぎょを上げる技。……これでサイコショックが相手のとくぼうではなくぼうぎょを参照する技だって知っててまるくなるを指示した

んだったら、いつもとは違ってバトルではものすごく冴える子なのかもしれない。
「大丈夫？」
「コソッ！」
　空中でサイコショックに弾かれたコソクムシはちょうどハクの前に着地した。様子を見るに、まだまだいけそうだ。数本ある足をわしゃわしゃさせ、ビートのゴチムを威嚇している。
「ふふ、とくこうが上がったゴチムの攻撃を耐えるとは、やりますね！」
「上がった……？」
「ゴチムのとくせいはかちき！勉強不足ですよ」
　かちき……確か、能力のランクが下げられたらとくこうが二段階上がるとくせいだったか。まさかコソクムシのむしのていこうはわざと受けたとか？だとしたらバトルがものすごくうまい。コソクムシのむしのていこうは普通なら効果抜群でもあまりダメージは通らないだろうし……ハクのコソクムシは普通とは思えないけど。
「このまま押し切りますよ！ゴチム、サイケこうせん！」
「コソクムシ、アクアジェット！」
「また強引に突破する気ですか！」
「いーや」
　ゴチムがサイケこうせんを放つと同時、コソクムシはサイケこうせんをアクアジェットで避け、
「なっ」
「名付けてアクアジェット・カット！カッコええやろ？」
　途中でカクッ、と急激に曲がってゴチムに向かって突進する。急な攻撃に対応しきれなかったビートのゴチムはそのままアクアジェットが直撃して、ボールのように弾き飛ばされた。ゴチムはそのまま地面にたたきつけられて、戦闘不能。
「コソクムシの動きやなか……」
「ええでぇコソクムシ！」
「コソッ！」

多くのコソクムシが自信のなさそうな目をしているのに対し、ハクのコソクムシは自信満々な目でふんぞり返っている。ハクの下には特殊な個体のポケモンが集まるのだろうか。
「くっ、お疲れ様ですゴチム。……少しはやるようですね。ですが、今のバトルであなたの実力は見極めました！既にぼくの勝利は決まっています！」
「なら一緒に覆そ！コソクムシ！」
「コソッ！」
「行きますよ、ミブリム！」
「ミィ！」
続けてビートが繰り出したのはまたもエスパータイプのポケモン。私やハクと同じくタイプ統一するトレーナーなのだろう。エスパーって何か見た目通りだし。どう見ても格闘タイプは使わなさそうだ。
「ミブリム、チャームボイス！」
「ミッミィ！」
チャームボイス。その名の通り可愛らしい鳴き声で精神的に攻撃する技。なぜかハッサムに効いているそれを、コソクムシはあっさりと聞き流して、
「コソクムシ、アクアジェット！」
「コソォッ！」
再びアクアジェット。あんな可愛いミブリムのチャームボイスを無視できるコソクムシは悪魔か何かなのだろう。それか、性別が一緒で単にむかついた、とか。こういう技って性別が同じだと効きにくそうだし。
「ミブリム、サイケこうせん！」
「コソクムシ、カット！」
チャームボイスに怯まず突っ込んできたコソクムシに慌てつつ撃ったサイケこうせんは、いっそ美しくも思えるコソクムシの曲がり（カット）によって避けられる。元々逃げ足がものすごく速いポケモンだ。複雑な軌道を描いて走ることなんて造作もないことなのだろう。

「ミィッ！」
「ミブリム！」
「アクアジェットで畳みかけ……って戦闘不能やん」
　そのまま避けることもできずアクアジェットが直撃したミブリムは、その一撃で戦闘不能になってしまった。コソクムシはそんなにこうげきが高くないはずなのに、やはりあのコソクムシはおかしい。コソクムシがおかしければアブリボンもハッサムもおかしい。
「くっ、お疲れ様です。ミブリム」
「よーやったコソクムシ！ナイスガッツ！」
「コソッ！」
「お疲れ様」
　抱き合って勝利を喜ぶハクとコソクムシを労う。ハク相手には立ち止まっていたらすぐにやられてしまうと学べたいいバトルだった。生贄となってしまったビートには感謝しておこう。
「……ふっ、今のであなたの実力はわかりました。次やり合えばぼくが勝つでしょう」
「うん！またやろな！」
「……」
　うんうん。わかるわかる。ちょっとスレてる子がハクみたいな見た目は可愛い女の子に純粋さを見せつけられるとクるものがあるよね。私は同性だからまだましだけど、異性のビートからすればその威力は絶大だろう。照れているビートの肩に手を置いてうんうんと頷いていると、手を振り払われて「なんです？あなた」と睨まれた。こいつ。
「ハクに負けたくせに」
「今のバトルは実力を見るためのもので、本気でやり合っていればぼくが勝っていましたよ」
「ハッサムは？」
「……」
　目を逸らされた。どうやら強がりでもハッサムに勝てるとは言えないらしい。

「ま、ぼくはもう少しここにいるのであなたたちはエンジンシティに行ったらどうです？長くいると暗くなりますし」
「ビートは一緒に行かんの？」
「……やることがあるんです」
「へー、忙しいんやなぁ」
　こういう時、ハクがクソダサコーデでよかったと思う。これで可愛い恰好をしていたら男が寄り付いて仕方なかっただろう。騙しやすそうだし。
「ほな行こ！マリィ」
「ん。じゃあね、ビート」
「またバトルしよな！」
「あなたがどうしてもと言うなら」
　余計なことを言ったビートはハッサムに睨まれてビビり倒していた。ほら、あの歳の男の子は素直になれないから許してあげて。
　ビートと別れ、向かうはエンジンシティ。ここのジムチャレンジで挫折する人も多いみたいだから、気を引き締めないと。
「うわ、マリィの手やわこいなぁ」
　私の手をにぎにぎしているハクがだるだるなので、余計に引き締めないと。